

## 哲学の人…西周

### 「哲学」の意味

今回は「哲学」という言葉を例に探っていきます。哲学は英語でPhilosophy：フィロソフィー、ギリシア語は、Φιλοσοφία：ピロソ피아、ラテン語はphilosophia：フィロソフィアです。語義的には、philein（愛する）とsophia（知恵、知、智）が結び合わさったものです。したがって元来「philosophia」には「知を愛する」「智を愛する」（愛知、愛智）という意味が込められています。そこで西周（にし あまね）は、周濂溪（れんけい）の士希賢（士は賢をこいねがう 通書志学）にならい、賢哲の明智を愛し希求するとの意で、「希哲学」（哲智すなわち明らかな智を希求する学）と訳しました。そして、のちに「希」を省き「哲学」と決めました（百一新論 1874）。西周は、草創期の明治政府の知的指導者であって、「哲学」という訳語がやがて文部省の採用するところとなりました。以来、日本で一般に、この訳語が用いられています。

本来「愛智（愛知）」と訳すべき語を「希哲学」と造語し、さらに「希」を外した時、言葉は民衆や日常を離れてひとり歩きし始めました。それは日本の「哲学」の発展にとって、不幸な事でもあります。元来、「フィロソフィー」は古代ギリシャでは学問一般として自然を含む多くの対象を包括していました。が、のち諸学が分化・独立することによって、その対象領域が限定されていきました。しかし、知識の体系としての諸学の根底をなすという性格は常に失われいません。分野に沿って哲学を区分けすると以下ようになります。

科学哲学 - 科学について検討するもの。

物理学の哲学 - 空間、時間、物質など物理学で用いる基本概念など、物理学について検討するもの。

数学の哲学 - 数学について検討するもの。

論理学の哲学 - 論理学について検討するもの。

言語哲学 - 言語とは何か、言語の意味や形式や言語と真理の関係、などを検討するもの。

分析哲学 - 論理的言語分析の方法に基づいて、哲学の諸問題を検討するもの。

倫理学 - 倫理・道徳について検討するもの。

生命倫理学 - 医療行為、環境破壊、死刑など生命にまつわる物事について、その善悪をめぐる判断やその根拠について検討するもの。

戦争哲学 - 戦争について考察するもの。

歴史哲学 - 歴史の定義、客観性についての考察、記述方法などを行う。

宗教哲学 - 神の存在等、宗教的概念について検討するもの。

美学 - 美、芸術、趣味について検討するもの。

心身問題の哲学 - 人間の意識や心と身体の関係、自由意志の有無などについて検討するもの。

法哲学 - 法について哲学的に検討するもの。

政治哲学 - 政治、様々な統治の様態にはじまり、政治的正義、政治的自由、自然法一般などについて検討するもの。

教育哲学 - 教育の目的、教育や学習の方法について検討するもの。

哲学史 - 哲学の歴史的な変遷を研究するもの。

…「哲学とは世界や人生、自然や社会の事象に関わる根本原理やあり方を追求する学問」と言えます。

## **日本語の豊かさの根源**

さて、「哲学」という日本語は誤解を与えた造語という意味では誤訳ですが、凄い言葉です。なぜなら、世界あるいは欧米露の国々の言葉は、全てphilosophia：フィロソフィアをもとに音写（音をそのまま自国語の言葉とする）したものです。世界で初めてかつ唯一、自国の言葉で翻訳したのが、「哲学」という日本語です。ちなみに中国語や韓国語の「哲学」は、日本から言葉を輸入した外来語です。欧米等の国々は、なぜ音写なのか…それはアルファベットのように、その1文字1文字が、意味を持たない表音文字だからです。その点、日本語は豊かです。漢字、ひらがな、カタカナ、数字（1, 2, 3…）があって、①表音文字、②表語文字（一つ一つの文字により、言語の一つ一つの語や形態素を表す文字）③表意文字（アラビア数字のように、各々の文字が表す意味は明確だが、言語の発音との結びつきが弱い文字）の3つ全てを備えています。さらに一文に、この漢字、ひらがな、カタカナ、数字の4つを巧みに織り交ぜて、繊細に表すこともします。このような特徴を持つ言葉は、世界中で日本語しかないのです。これが、日本語の豊かさと優しさと力強さです。

## **生き方に関わる日本語**

日本語の持つ包容力から言えば、「カステラ」や「コンピュータ」のように、「フィロソフィア」あるいは「フィロソフィー」と音写訳ができたのに… 漢字訳にしても「愛智」を当てはめられたのに… 何故わざわざ造語としたのでしょうか。それは「カステラ」のような物品ではなく、生き方に関わる言葉として、西周は維新に係るところ深みある表語文字で表したかったのかも知れません。私達が普段何気なく使っている「社会」「個人」「自然」「自由」「恋愛」等の人生に関わる言葉も、全て開国に伴って、ヨーロッパから入ってきた言葉の訳語です。「リバティ」あるいは「フリーダム」といった人の生き方としての自由の発想と言葉は、それまでの日本にはありませんでした。それは封建的な社会において、自由は「我が儘」や「自分勝手」といったイメージを持つものでした。このように文明開化は物や制度にとどまらず、言葉とその捉え方まで影響しています。これら生き方に関わる言葉の一語一語を意味ある漢字に訳したのは、西周（現獨協大学初代校長）のほか加藤弘之（東大二代目総長）、森有礼（初代文部大臣）、福沢諭吉、中村正直（東大教授）など明六社の人々によるところです。

よって私達が使う日本語は、その豊かさだけでなく、先駆に携わる人々の想いや労苦の下に成り立つことを認識したいです。一語一文を大切にすることはもとより、文章解釈に終始するのではなく、言葉を自身の中に取り込んで自分のものとする。即ち文意に沿って自分なりの見方や考え方、感じ方を築いていければいいですね。豊かな日本語をもって、自分を豊かにしていきたいです。

参考文献 : Wikipedia「哲学」「西洋哲学」